

第 9 回「グローバル人材とは何か！ 求められる能力とは？」

長谷川和子（京都クオリア研究所）

去年辺りから特に「グローバル人材」という言葉を、新聞とかいろんなメディアで毎日毎日目にするようになってきていますが、グローバル人材って一体何なのか。英語が話せる、外国語ができるということがグローバル人材の条件なのか、それ以外に何があるんだろうか、もう一方で、グローバル人材って、ほんとうのところももう一つよくわからないという声もよく聞くようになりました。そこで、原点に帰って、このグローバル人材についてどう考えたらいいかを、みなさんとともに、ここで考えてみようということにいたしました。これから、堀場製作所最高顧問の堀場雅夫さん、京都大学人文科学研究所教授の岡田暁生さんのお二人にスピーチをしていただき、その後、お二人を交えてのディスカッション、ワールドカフェとつないで議論を深めて参りたいと思います。

☆スピーチ 1

▽スピーカー

堀場製作所最高顧問 堀場 雅夫さん



実は、私は、もっとええテーマで発言したかったのですが、このテーマはちょっと不満なんですけど…。正直言っちゃいますね、グローバル人材って、何のこっちゃ、わからんのですよ。ただですね、数字的にいきますとね、私の企業も今、グループ全体で 5500 人いまして、そのうち 2000 人プラスαが日本人で、あと全部外国人、その多くがアングロサクソンですね。そして、売り上げも 60%が外国やし、ほな、グローバル企業や、っていわれたら、ああそうかというわけで、そやから何やねん、と聞かれても、普通に仕事しているだけで、看板にグローバルと掲げているわけでもないし、毎日、「グローバル、グローバル」というてるわけでもない。英語で会議もするし、日本語ということもある。韓国の方は韓国語、中国の方は中国語、ドイツ語、フランス語も話す人たちがいるというのが、日常としてある。それが別に何やねん、といわれても何やねん、というのがグローバルなんです…。

そうは言うものですねえ、以前、私もグローバル人材というテーマをいただいて、ええ格好して、まあ、「国際的視野に立って、先進国の人間と対等に話ができるような人間」とか言っていたんです。

これも、しやから何やねん、といわれたら終いで、実は、現在進行している、世界全体、まあ、先進国は先進国、発展途上国は発展途上国ですね、どうも、われわれが今まで「正道」と思ってきたいろんなことが、外れてきているんですよ。一番大きい問題は、外れてんのを知りながら、外れたトレンドの中で生きていくのか。あるいは、それはおかしいと、そういうものをなおす事こそ、ほんとうにグローバルな企業であり、国家であると思うんですけども、それをやるのは、政治家なのか、経済人であるのか、あるいは、社会人なのか、学者なのか、いうところが、一番大きい悩みのタネになってるんですね。で、私は、外れてきたものを正常に戻すということがない限り、ほんとうの意味のグローバル人間を育てるといふ大それたことは、なかなかできないと思うんですね。

そこで、何が外れとんにゃ、ということを考えてとですね、例えば、福島原発でいろいろなことがあった。で、フランスは、あの事故が起こってすぐですね、政府専用機を日本に送ってきて、長期間、

日本に住んでいる人はともかく、短期に日本に来ている人は、全部、国に帰れといったんですよね。うちの会社にも、フランスの会社から何か連絡が来て、何のこっちゃろくなんて言っていて、その後、帰ったのか帰らなかったか、どないしよったか知らんけど、それはそれで、とにかく、それぐらいフランスは早く反応して、一刻も早く、危険なところから国民を連れ出さないかんという判断をした。それほど敏感な国ですよ、後でずっと、福島や宮城の女川の発電所(東北電力)を調べた。その結果、これ、前にも話しましたが、私がこないだフランスに行った時、「日本は大きな被害を蒙り、心からお悔やみ申し上げたい。ただ、そのおかげで、われわれフランスの原子力関係者は、原発へのはっきりしたスタンスを持つことができた」と言ったんです。



どういうことかという、女川は、震源地が福島よりはるかに近く、震度も福島より大きかったが、女川の原子炉、並びに配管など付帯施設を全て調べたが、ビリッともしていない、ということなんです。現在の原子力発電所の設計というのが、地震に対してどうなるか、誰も、シミュレーションしただけで、それを実際に実験するなんてできなかったところを、今度の地震と津波の大変な被害の中で、今の原発はこれほどの地震にもびくともしないということが実証されたというわけです。つまり、現在の原発の設計は、パーフェクトで安全だという結論が出て、もう安心だと。フランスだけでなく、世界中がこのデータを持ち帰ったんですね。

それに比べて肝心の日本というのは、「大変、大変」と言うばかり。その大変なのは、もう、非常にはっきりしていて、あの時に、送電回路が切断されて、ポンプが動かなくて、非常電源、非常ポンプも水につかって、結局、冷却ができなかったことです。とはいうものの、これ、山口先生によると、福島第一原発の3号機と2号機は、それぞれまる1日半あるいは3日間、中の炉の水蒸気のプレッシャーでタービンを回してRCICが冷却して暴走していなかったんですが、結果的には、海水注入の決断が遅れて、冷却できずに終わってしまった。で、冷却水を確保すれば、どんなことが起こっても大丈夫やることが明確になった。だから、あの事故で、今の炉というのは、冷却の問題さえしっかりすれば大丈夫という結論が、先進国ではだいたい出ていて、それなのに、日本だけは、原子力発電所は「危険がいっぱい」ということになっている。

つまり、同じ事象がですよ、日本は曲がりなりにも先進国のトップを行ってるわけで、フランスもそうですよね。同じトップに行く国が、同じ現象を見て、一方は、こりゃえらいこっちゃ、一方は、これで大丈夫なことがはっきりした、といているわけですが、これ、グローバルな人間いうたらどっちに付くの、日本側？ フランス側？ わからへんやん。だから堂々と、その、先進国に出て説得できる人間いうても、これ、どっちか、サイエンティフィックにはわからへんさかい、要するに、そういう現実をです、完全にサイエンティフィックに、思想なしに、それを理解してちゃんといえるような国に住んでんとですよ、一人だけが、国の政策、世論と全く違うことというて、日本代表として、私はグローバルに発言します、と言うたって、おまえの国のみんなはちがうことゆうとるやないか、おまえは何や、どこの人間やということになりかねんすわな。

ですから、私は、ほんとうにグローバルな企業、グローバルな人材を育てるには、まず、その国がですよ、やっぱり、その国の考え方、施策というものはっきり出して、しかもそれが誰もが納得するものでなかったらですね、そこの国民が、いくらええことをいうても、あらあ、けったいなおじさんが、けったいなことを言うると、というふうなことになってもしょうがないわけです。

そこで、私は、グローバルな人間というのは、ただ単にAさん、Bさん、Cさん、いろんな人が個人



で「私はグローバル」っていうのも結構ですけども、私は、グローバル人材っていうのは、国家とともにですね、正常な判断ができて、正常な施策ができて、という人物と思うんですが、まあ、マスコミはとびっきりおかしいんでちょっと置いといてもですね、せめて政治家、経済人とか学者とか、まあ、世間のリーダーの人々が、しっかりした国の判断や施策を背景に、正常な判断と正常な実行力を持たない限り、個人でいろんなことを言っても、これ、なかなか通じませんわ。私なんか、いろんなところでいろんなこと話ししますが、

またあのおっさんが来て、変なことという、ということであって、決して誰にもなかなか認めてもらえない。

その証拠にですよ、あれだけ騒いだダイオキシンは、一体どこ行きよったんや。オゾンホールでみんな皮膚がんになるというったけど、誰が皮膚がんになったんや。CO₂、温暖化の問題にしるですよ、IPCCがいろんなこというけど、あのICPPのスキャンダル、要するに、温暖化のネガティブデータをみんな捨てて、ポジティブデータだけ集めたという、あんなスキャンダルがあったのに、日本の新聞は、こっから先もそれを伝えてませんわね。そういう問題はどうかと。何や、「原子力発電所が大変」というたら、みな「大変、大変」。「ダイオキシンでみな死ぬ」と言うて、死なへんかったら、放ったらかし。オゾンホールの皮膚がんも、もう忘れてますわな。「ものすごく寒い」というと「温暖化があるから寒なった」という、なんぼ聞いてもわけのわからん温暖化の説明がされている。こんな日本の社会の中で、グローバル人材が一体どう育っていくのか、みなさんに考えていってもらったらいいなあというふうに思ってますが、私は結論が出ないんですね。

それから、この中に、オリンピックを大切にしている人がいたら申し訳ないんですけど、東京オリンピックは、全くこれまでの流れに逆行していますよ。もう、今は歳ですから出ませんが、かつてはですね、地方分権、ぼくは、この言葉が嫌いで、「地域主権国家」というたら、ついに民主党がやっと、地域主権という言葉を使い出しましたが、地方分権をいかにするべきか、首都移転、首都機能分散というような委員会にいろいろ引っ張りだされて、いろんなこというたけど、これ、どっかに消えてしまいましたわな。今、東京オリンピックでわあわあ騒いでいるけど、これと東京一極集中排除と、どういう関係があるんやろう。オリンピックを開いたら、東京が困ってバラバラになってしまうの？ そやから、首都機能分散のためにオリンピックを開くんですかね。何万人の選手村は、その後マンションになるそうですが、入るのは人間ですわね。まさか、サルや山極先生のゴリラが入るわけではない。つまり、オリンピックをしたら東京一極集中がさらに進むということと東京一極集中反対というのを、一体、誰がどこで調整しているんでしょう。そんな高度な政治的なことを、ロジカルに説明できる人がいたら話を聞いてみたい。こういう矛盾を誰もいわないので、先日、ちょっとそういうことをいうたら、「お前はオリンピック反対か。国賊や」といわれてしもて、まあ、なかなか日本というのも恐ろしいことになってきてるのかな、と…。

それから、リニア新幹線もそうなんですわね。京都に駅を作れと言ってますが、それはそれでいいんですけどね、500km/hで走るやつが京都停まって大阪に停まったら、どうなります。これ、飛行機と一緒にすやん。伊丹から京都に飛行場があるみたいなもので、かえって離着陸だけで時間がかかり、結局、「のぞみ」のほうが速かったということになりますわな。あんなもん、ビューンッと行って、なんぼですから。それと、もう一つは、リニアの関係者に聞いたら、これで、大阪の方も名古屋の方も、東京に「出

勤」できますと言うんです。これまた、東京一極集中や。何にしても、東京一極集中のために何兆円、何十兆円のお金を使ってるのを、何でみんな黙っとるのかと思うんですが、日本は、東京一極集中がええみたいですね。

みなさんも、韓国に行かれたことがあると思いますが、今、ソウルは一極集中で東京と競争してるというふうな具合なんです。人口の 30%、G N P の 35~40% がソウルに集まっています。で、フィリピンはマニラですし、今、ごちゃごちゃになってますけど、タイは、バンコックに集中しています。こうしてみると、途上国は全部一極集中なんです。これは、要するに昔のコンビナートの考えがそうなんです。石油を持ってきて貯めて、発電して、石油を蒸留しガスから液体、個体まで精製し合成繊維などいろんな化学製品を作る。これが、10^キ四方にあつたら、モノを動かすのも、人が動くのも何もかも便利ですね、一極集中したら。効率という面では、一極集中がいい。ところがアメリカに行くと、ワシントンは政治の中心だが、東から真ん中、西にかけて、ローカルにそれぞれのいろんな文化や産業が起こって、それから合衆国が成り立っている。フランスも、パリは確かに首都としてすごいですが、各地方に有力な産業、独特の文化がある。もちろんイギリスだってそうですよね。つまり、先進国というのは、ローカルな文化をベースにした産業、文明が起こっている。そのトータルが、その国の力になっているんです。



実は、日本だって、この縦長がいいんです。北海道から沖縄までね、冷たいところから暖かいところまでずっとあって、食べるもんも違うし、人間の考え方も、四季折々のできるもんも違い、価値観も違う。それ全体を含めて、それぞれの特徴を持ちながら、日本国民、あるいは日本国家としての大きな国ができあがって、価値観の多様性に対応できるはずなんです。それこそが、グローバル国家であり、そこに住んでる人がグローバル人であると思うんですが、その一番ええところを東京一極集中でダメにしている。よくいわれる同じ駅前の風景。あるいは、女の子のファッションは、四条河原町と六本木も変わりがない。何もかも東京の価値観が全てであるって、つまり、文化の「全体主義」ですね。これが、せつかくの日本っていうのを台無しにしている。私が、グローバル人材で言いたいのは、こういう問題を含めて、ほんとに、日本の国全体で考えたグローバル化の施策をはっきりさせ、それに、われわれ国民の価値観をシンクロナイズドさせることが大事なわけで、そうでないと、グローバル人材なんていうても、おかしいことになるんじゃないか。

それともうひとつはですね、18世紀の産業革命から、ずっと近代西洋文明が発展して、大きな役割を果たした。日本も、明治維新で西洋文明を取り入れ、特に戦後は、日本は、資本主義と科学技術というものが車の両輪になって、急速に、ゼロからわずか半世紀の間に経済大国になりましたよ。これ、近代西洋文明を一番うまく利用したのが戦後の日本だと思いますが、それ自体が、今やですね、限界に来てますよね。特に、資本主義というのが、金融工学、いわゆるマネーゲームといわれてですよ、いわゆる「お金を弄ぶこと」によって金儲けをする。必ず得する人があれば損する人もある。これいうたら、詐欺師みたいなやつが横行しているわけですよ。こんなもの、資本主義でも何でもありませんが、ルールの上においては成り立つという、変な方向に行ってるような気がします。

また、科学技術の方も、電気、機械、物理、化学、すべてを利用して日本は発展してきたけど、私、やっぱりね、生命というものの中に足を踏み込んだ時に、非常に大きな問題が起こると思う。NK細胞とかクローンの問題とか、i P S細胞とか、不治の病が治るとかいろいろあって、これ、例えば、どん

どん人工の臓器が生まれて、お金持ちの人は次々部品交換して、なんぼでも生きていく。こうなったら、これどないなるのか、ちゅうことも考えていったら大変なことですわ。ただ、私も、個人的には、できたらクローン2、3匹ほしい。ものすごええもん。家に置いといたら嫁はん安心するし、会社においておいたら、よう働くし、私は、先斗町や祇園とか行きたいところがいっぱいある。みんなハッピー、と言いたいところですが、会社や家にばかりいるのは、もっと面白いことをしたいと、遊んでる堀場雅夫に不満が出てきて、結局、どれが本物かわからんけど、3匹で血で血を洗う争いをするようになってしまいかも知れない。

まあ、いずれにせよですね、生命の中に踏み込むと、ややこしいことがいっぱい出てきよるんですよ。こういう問題は、モラル的にもみんなのコンセンサスをピシッと得て、ほんとにサイエンスの発展は人間の幸福につながるか、あるいは、資本主義というものはどういう条件の元において、人間のためになるか、こういうフィロソフィーをですね、もう一度ピシッとやらないといけない。こういうことを踏まえた上で、グローバルな人間ができ上がらなかつたらダメではないかな、っていうのが、私の問題提起です。



長谷川 和子（京都クリア研究所）

第二次世界大戦がなかったら、多分物理学者になっていたのではないか、という堀場さんの科学者らしい内容、それに経営者のスタンスも織り込みながらの1月にふさわしい堀場さんとしてのグローバル社会、あるいはグローバル人材をどう捉えるかという話をさせていただきました。次は、岡田さんにスピーチをしていただきます。西洋で生まれたクラシック音楽が、世界共通の文化になっているわけで、その辺を一つのヒントにしながらグローバルということがどう捉えられるのか、グローバルな人材をどう捉えるか、どう育てるのかということでお願いいたしました。

☆スピーチ1

▽スピーカー

京都大学人文科学研究所教授 岡田暁生さん



2日前に歯を抜かれまして、ちょっと滑舌に不安があるんですが、嫁はんにいわせますと、いつもの早口をなおすいい機会だということらしいので、その辺を意識しながら、進めていきたいと思います。

「グローバル人材」というのは、純企業的な、官僚的な概念だと思うんですけども、実は、私の家系は、嫁はんの家系も含めましてですね、サラリーマンってのがほとんどいない家系なんですね。一人、日経の記者がいますけど、それぐらいですから、私は、大袈裟に言うと部長さんと課長さんが、どっちが上なんかも、まだわかっていないような人間で…。つまり企業的なグローバル人材の意味するものを、全く知らない。ただ、最近は大企業の研修会のようなところに呼ばれることが結構ありますので、まあまあ、企業文化というものが、どんなもんかというのは全くわかって

いないことはない。それと、大学におりますと、この問題を避けては通れない、ということ。それと、もうひとつは、私の専門である音楽の世界は、言葉が介在しませんから、非常に国境を超えた人の行き来ができるので、だから、その辺りから、独特の「グローバル人」というようなイメージは、それなりに持っているつもりです。その辺りを、お話ししたいと思います。

まず、「グローバル人材」というのは、まことに奇っ怪な言葉でございます。「Global Human Resource」これ、英語を母国語にする人に言っても「はあ？」みたいなもので、こんな言葉を考えたのは、どこのバカかと思うんですけども。そして、これ定義せよと言っても、誰も定義できない。なんとなく、みんなが漠然としてイメージがあるだけ。それは、どういうイメージかという、想像するに、ウォール街エリート、ハーバードのビジネススクールかどっか出たようなね。それから、ハーバードの中を肩で風きって歩いているような中国人のエリート学生。こういうものへのコンプレックスみたいなものが、多分すごくあるとぼくは思いますね。この言葉の中に、外でべらべら英語をしゃべりよる中国エリートに負けたらあかん、みたいなイメージが、結構、この言葉が使われる時にはあるんじゃないかと気がします。それから、ノーベル賞を受賞するようなスーパー科学者のイメージ。そこに、半沢直樹のイメージがちょっと入ってくる、と。まあ、きわめて劇画的なイメージなわけですね。で、だれも、それが正確に定義できないにもかかわらず、まるで、それを出したら何でも通用する「錦の御旗」のように、これが見えぬか、みたいに、言葉だけがひとり歩きしている、これは、非常にやばい状況だと思います。

最近の中央公論で「大学の悲鳴」という、とてもバランスのいい特集がありました。その中で、同志社大学の学長に就任された村田晃嗣さんが、鼎談で面白いことを言っているんです。それは「そもそも、グローバル人材の定義がはっきりしていません。定義がはっきりしない中で進められているのが、日本のグローバル化を反映しているように思われます」。これ、すごいですね。何のことも誰も説明できないのに、あることにされて、ものごとがザーッと進んでいく。それからもう一つ。司会が「世界大学ランキング上位 100 校入り支援するため、年間 100 億円の大学予算を組み込んだ。10 校を『スーパーグローバル大学』に指定しランキング上昇をめざしていますね」と尋ねたのに対し、村田さんは「そもそも、『スーパーグローバル大学』という名称がダサイですね。こんなこと英語で言うのはかなり恥ずかしい」その通りだと思います。はい。



それで、もちろん、私は、「グローバル企業に求められる若手人材」などということがお話できるわけでもなく、あくまで音楽という文脈で、何かグローバルということをお話することを求められているわけで、それで、すぐに思い出したのは、私が最近、習って心酔しているジャズの先生なんですね。アメリカ人、白人ですけど、この方、めちゃくちゃ上手い。ニューヨークでもロサンゼルスでも、どこでも生きていけるようなミュージシャンですけど、何故か日本が好きで、大阪の中津に住んでいるんです。フィリップさんといいます。つい最近、そのフィリップさんに「ジャズミュージシャンは、世界のどこでも、ナイトライフのあるところならどこでも生きられるからいいですね」と言いましたら、彼は「お金持ちにはなれないけれども、自分の生まれた国にこだわらなくていいのは、ジャズミュージシャンの一番いいところだ」と言っていましたね。生まれた国に縛られる必要がない。自分が住みたい国で暮らせるというのが一番いいところだと。確かに彼ぐらいの力があつたら、ニューヨークでもロサンゼルスでも、上海でもケープタウンでもパリでもベルリンでもストックホルムでも、どこでも日銭は稼げるので、自分が住みたいところで、住める。ぼくに言わせたら、これこそ最高に幸福なグローバル人であります。

多分、めちゃくちゃ金儲けはできないだろうけど、彼は、レッスンも含めて、毎日3万円ほど稼ぐという話なので、3万円も毎日稼げたら、もう何にも文句はありませんわね。

ところが、問題はこれから先です。つまり、「グローバル人材」と口にする時、文部官僚や大学執行部、企業人が思い描いているのは、言うまでもなく、こういう幸福な人のことではないはずなんです。彼らは、「兵隊」がほしただけなんです。これ、非常に問題なんです。グローバル人材っていうのは、実は、上から目線の言葉であって、個人の幸福を含意している言葉じゃない。上が使いやすい兵隊がほしい、ということですね。なぜなら、グローバル人材が、どんどん日本に生まれてですね、それこそ、私のジャズの先生のように、生まれた国と関係なしに、自由に世界のどこでも生きていけるようになったら、恐らく今の日本だったら、別の国で生きたいという人もいっぱいいるでしょうから、もう、大リーグ状態というか、日本のプロ野球状態、サッカー状態が始まるわけです。一番いいやつは、どんどんどんどん、外へ出て行ってしまふ。これ、いいんですかね。私、個人のレベルとしては、これ大変素晴らしいことだと思うけれども、国家、会社レベルにしたら、困るわけですよ。当然、グローバル人材みたいなことを口にしていて人間は、なぜか、極めて希望的な観測として、外に自由に派遣できるけれども、ブーメランのように自分のところにもどってくる、そういう人間をイメージしているんですね。端的にいうと、鵜飼の鵜ですわ。鵜飼の鵜として、長良川の鵜が鮎を加えて戻ってくるように、海外で得た「獲物」を日本に、会社に、大学に持って帰って来い、と。まあ、これ、悪いとは言いませんけど、

一応、こういうことが明らかに含意されているといことは、押さえておくべきだろう、と。

ここからわかりますように、グローバル人材ってのは、よく見ると、この言葉だけで、結構、いろいろ分析ができるわけですね。私は、似たような言葉だけでも、三つカテゴリーを区別したいと思うわけです。一つは、「グローバル人」もう一つが「グローバル人材」そして「グローバルエリート」です。で、最初のグローバル人は、いうまでもなく、私のジャズの先生みたいな人です。

世界のどこでも生きていける人、オンリーワンで、その人の代わりがない人、unsubstituable といふかな。ま、真の自由人で、極めて幸福な人でしょう。先程も申しましたけれども、これ、人の幸せという点では素晴らしいことだけれども、もちろん、国家や大学や企業人は、こういう人を求めているんじゃないんです。求められているのは、グローバル人材です。どうも、グローバル人材教育は「エリート教育」の一種だと、多くの方が勝手に思い込んでいるようです。しかし、実はこれ、エリート教育でも何でもございませぬ。何故かと言うと、人材というのは、兵隊と同じです。兵隊は代替がききます。一人死んだら、代わりをぽっと入れたらしまいですからね。代替がきくような人間は、エリートでも何でもないわけですね。エリート教育と違うんですよ、グローバル人材を育てようというのは。兵隊教育なんです。次から次へと部品のように、代わりを入れたら終いなんです。

それで、そもそも、こんな風に代替がきくような人間、兵隊に、グローバルな活躍ってできるのかという問題があるわけですね。当然ながら、そいつの代わりなんてなんぼでもおるで、みたいな人間がグローバルに活躍できるはずがないやろ、という話です。なんかこの辺り、結局、高度成長期の「企業戦士」のイメージが、21世紀風に言葉、装いを変えて流通しているだけの話なんです。企業のためにしゃにむに働け、東南アジアに出て行け、中国に出て行け、テロに遭っても、南米に、中南米に出て行けっていうわけです。

言うまでもないけど、兵隊というのは、自分の頭で考えませぬから、言われたことを機械的にやるだ



けですから、自分の頭で考えられないような人間って、グローバルに通用するはずがない。しかし、逆に、自分の頭で考える人間っていうのは、伝統的な日本の社会の上司にとっては、結構扱いにくいわけですよね。ぐちゃぐちゃいう奴というわけです。この辺りの認識不足というのかなあ、これまでの日本の成功体験が妙に影響していて、そこから決定的に先に出られず、でも、なんか 21 世紀風の見せかけだけは整えて、このあたりから、グローバル人材という妙な言葉が出てきたんちゃうかなあ、という気がします。

それでですね、私も 50 歳を超えまして、同級生なんかで、すでに大企業の執行役員とかになっている連中とかが出てき始めております。彼らからいろいろ今の企業の状況とか聞くことがございますけど、彼らが口を揃えて言いますのは、今の企業のトップ連中の多くってのは、完全に思考停止に陥ってんにゃと。どうしたらええか、さっぱりわからへんにゃと。だから、ひたすらどうしたらええかってのを教えて欲しいだけやねんということで、こうした話をよく聞きます。もし、そうだとすれば、グローバル人材という言葉は、何か、思考停止に陥っている今の日本の指導的立場にある人たちが、いわば、そこに「ウルトラマン願望」を投影しているような気がして私は仕方がない。つまりですね、世界中のどこにでも派遣されて、がんがん仕事を取ってくるような「スーパーサラリーマン」が出てきてくれ、出てきてくれ、という願望ですね。スーパーマン願望。

まあ、大学人としてはですねえ、正直申し上げて、多分、大学が盛んにグローバル教育というのは、大学も企業のお金がたくさん入っていますから、そういう人たちから「グローバル人材を育ててください」と言われるので、こういうこと言うんでしょうけれども、あえて大学人として、堀場会長始め企業の方も多いい中ですけども、あんまり勝手なこと言わんといてよ。自分たちのウルトラマン願望を大学に押し付けんといて、という気がちょっとします。結構真面目に怒っています。でまあ、言ったら、海外のどこにでも派遣できるような兵隊作れって、大本營でガダルカナルやどっかに、兵隊作って行かせるような勝手なこと言うなよ、とちょっと思ってしまうんですね。

もう 1 回言いますと、「人材」という言葉は、極めて横並び的だ。これ、歩兵に対して使う言葉なんだということなんです。グローバルときたら、普通は次に来るのは人材ではなく「エリート」なんです。やっぱりエリートなんです。で、「グローバルエリート」を育てますと言うべきであって、つまりその他大勢はいりません。グローバル人材を作ります、なんてお茶を濁したらあかんで、とぼくは思うわけです。ちょっとずるいんですよね、平等幻想を振りまくという意味でね。グローバルと言ったら、エリートです。選ばれた人です。

では、私の考えるグローバルエリートってのは、私も大学人として、もし可能なんだったら、そういう人を育てたい気持ちが、非常に強くありますから。ただ、あまりバカバカしい、グローバル人材なんてこと言われますと、そんなもん、作れるわけないやないか、とってしまうわけですし、今の大学は極めて劣悪な環境にございますから、なんか、そういう教育者としての夢が、次から次へと潰れてまいります。でも、それなりに夢はございます。私の夢のエリート教育みたいなものをちょっと考えますと、先ほど堀場会長もおっしゃいましたけども、グローバルエリートというのは、フィロソフィーがある人間ですよ。自分の頭で考えられるということです。



で、問いを發してみたいと思うんですが、では、エリートというのは育てるものなのか。育ててもらわなエリートになれないのか、という問いが出てきます。これ、世話をしてもらわんとエリートになれ

ない。つまり、養殖ハマチのような若者がエリートになるのか。実は、育てられたエリートなんていうのは、ある意味、言語矛盾であるわけですね。私が思い出しますのは、もう亡くなられましたけども、音楽評論家の吉田秀和さんのある記者会見での話です。彼は、吉田賞という自分の名前を冠した評論賞を出しておられ、その会見で、ある記者が「吉田さんはあまり後進の育成はされてこなかったように思いますが」的なことを訪ねたのですね。自分の立場を守るために、ライバルになるような人を引き上げなかったんじゃないかというニュアンスがなくもなかったと、その場にいた方はおっしゃってました。しかしこの質問に対する吉田さんの応答が実に見事なもので、「才能は勝手に出てくるもんだ」と一蹴したということです。もう一つ思い出しますのは、大ピアニストのアルフレート・ブレンデルがインタビューで言っていたことです。小さいころ習ったピアノの先生のことを言っている言葉ですが、こういっていたんですね。「私は、彼女に非常に感謝しています。なぜなら彼女は、私に何も教えてくれませんでした。私の邪魔をしなかったから」。そして、「これは冗談ではない。ほとんどの教師は、教育しているつもりで、実は邪魔している」というんですね。けだし名言と思います。

これらの言葉が示しているのは、恐らく教育というのは、真の才能を潰すだけだと。教育すればするほど、才能は育たなくなるという側面があるわけですね。重要なことは、恐らく教育プログラムよりも、環境を作る話なんですね。そして、エリートがしやすい環境を作った後は待つ。作ろうとしない。多分一番大事なのはこのことなんです。エリートの促成栽培なんかできない。促成された養殖ハマチみたいなもんはエリートじゃない。意地悪くいえば、エリート教育のプログラムなんて立ててる段階で、アウトやいう話なんです。その段階で出てくるのはエリートじゃないと、もう、最初から答えは見えているわけですね。

ではですね、真のグローバルエリートが出てくるための環境とはどんなものだろうか、と私、考えました。私、大学人として15年ぐらい、大学で奉公してきたの恨みつらみを、ちょっと申し上げさせていただくと、きょうは企業の方がいっぱいられると思うので、申し訳ないなあと思いながら言っていますが、その最大の理由の一つが、企業の一括採用です。大学で教えていると、ええかげんにせえよ企業、とい思いますわ。さあ、これから、こいつは大きくなるでという時、パタッと授業に来こんようになるんですね。半年間、下手すりゃ10カ月。ほんまもう、戻ってきた時には、もう後、卒論と何かがちょっとあるだけ。実質、半年ぐらいしか教育できないんですよ。専門教育が始まって半年も経たないうちに、就職戦線なんかには駆り出すなよという話なんです。エリートを作ってほしいんだったら。

いうまでもないけれども、グローバルに通用する人間が出てくるために最も重要なことってというのは、恐らく、若い時の異文化体験のはずです。これは、堀場会長もおっしゃった「複文化性」のような、複数の文化がわかるということでしょう。一元的な文化の中で生きてはいけません。地球の表面には、無数のローカルティエがあるっていうデコボコ性をちゃんと理解すること。どれだけ世界がグローバル化、つまり一元化されているように見えたって、実はグローバルというのはすごくバーチャルな世界なんだ、ということを理解すること。これが異文化経験です。

そしてですね、こういうことをいうと、すぐに日本の大学は、これ京大もいうてますけど、授業を英語でするとか言い始めるんですよ。つまりですね、異文化経験は、日本の大学で授業を英語でやっても、決してできるものではない。だって、授業が終わったら、すぐ日本語に戻れるわけですからね。若い時に海外に行って、酷い目にあわないといけないという話です。放浪したってかまへん。放浪の旅、半年、1年で、全然かまへん。



ところがですね、今の若い人が、何でこんな外に出て行かないかという、やっぱり一括採用のストレスなんですね。これは間違いないんです。つまり一括採用のあの時期を逃してしまうと、もう、社会からドロップアウトしてしまうんじゃないかという恐怖心がものすごくあるみたいなんです。それは、例えば、ぼくぐらいの頃はですね、就職活動するのは、1年後にしようか、その代わり、1年、アメリカの大学に留学したいなんてのがいました。そこまであくせくせんでも、ある程度就職ができるということがあったからだろうとは思いますが、まあ、さらにいえば、大学紛争のころ、団塊の世代の人たちが学生のころは、4年間遊んでたわけですからね。4年間、世界中を旅してたっていう人がいっぱいいたわけですからねえ。恐らく、バブルのころまでっていうのは、今に比べると、ちょっと放浪期間みたいなのを、大学生活の中に作るっていうのが楽しかったらと思うんです。そして今、学生はそれができなくなって、企業は一括採用。焦って早い時期の青田刈りなどなどで、どんどんどんどん、若い人が大きく育つ前から刈り取られてしまうということが起こっている気がいたします。

それで、私が言いたいのは、エリートっていうのは、「学校を真の意味でも卒業した人」だってことです。つまり、学校でプログラムを作ってもうて、餌付けしてもらわなくても、自分で学びができる人。これがエリートです。エリートに一番必要なのは、学校のプログラムをさっさと卒業してしまえという話ですね。ところが、これに反して、逆に、どんどんどんどん高年齢化するわけですね。博士課程まで、「スーパーエリートを作るためのプログラム」やいうてるからお笑いごとですわ、ほんまに。昔にですね、学校を卒業するための期間っていうのは、旧制高校の3年と大学の4年、7年あったわけですね。7年かけて「学校を卒業」できたんです。この間に、自立できたわけですよ。今は…、という話ですね。

私の「夢のグローバルエリートの卵教育」なんです。私としてはエリートを育てるなら、最低6年、6年は大学にいさせたいですね。その内訳は、まず、20歳になるまで、最低半年、海外経験をさせる。これは、放浪生活でも構わない。それから、1年半、海外の大学に放り込む。私の経験では、1年ではものになりません。慣れたところで終わりになりますから、ほんとは2年間といきたいところですが、まあ1年半。これで、海外の生活がトータル2年になりますね。あと、3年は日本の大学で勉強し、そして、就職活動と卒論でバタバタ、と。

この間、2度海外経験をやるわけですけど、一つは、英語圏で構わない、英語は大事ですからね。しかし、もうひとつは、英語以外の国というのを義務付けたいですね。これ複文化性という話です。つまり、グローバルとか異文化経験という、さっきからバカを連発していますが、バカというのは、すぐ、これを英語のことやと思ってしまいますよ。堀場会長も、先ほど再三おっしゃってますけども、一元的な世界っていうのは、これ非エリートのなんですね。だから、英語話せたらエリートと思っている英語一元人間っていうのは、実はエリートでも何でもないという話です。とにかく、一つは英語でかまへん。これは、ひょっとするとオブリゲーションだろう。でも、もう一つは、英語以外、どこでもいい。英語を使っていない国のほうが視野が広がるだろう、ってことですね。



えー。もう一つ英語の問題です。これ、私の国際学会に出た経験から言いますと、英語力というところぐ喋ることと勘違する人がいますが、私にとっては重要なことは、喋ることではありません。聞き取りです。聞き取りが一番大事です。日本人が、何で、英語のときに臆病になってしまうかという、相手が何言ってるか聞こうとするからなんです。多くの中国とかアメリカの人とかが、何であんなにガンガン喋れるかという、僻みかもしれませんが、相手の言ってることを聞いていないからですね。学会でやりとり見ていたらわかります。「何で言わはったこと、また質問してるんや」みたいなこと、ブワ

一と喋りまくる。ところが、日本人は、まずわかろうとするもんやから、ワンタイミング遅れてしまうんですね。私の経験でも、「ちくしょう、あの時いうておけばよかった」ということになる。一番大事なのは、リスニングです。極端なこというたら、どんな会話が進行しているかわかっていれば、話すのは、イエスとノーだけで十分なんです。こう、相手の横で聞いていて、ポイントでイエス、ポイントでノーというたらしまいです。話はこれだけで通用するんです。リスニングはものすごく大事ですね。ぼくだったら、リスニング教育だけは日本にいるうちにやりたいですね。ただ、結局のところ、聞いてちゃんと理解するためには、英語力以上に事柄がわかってなあかんわけですね。例えば、ぼくなんか経済に疎いから、日本語でも、日経新聞の記事は、何が書いてあるかよく理解できない。事柄の理解が一番大事。で、事柄を理解するためには、やっぱり日本語が一番重要なツールやっていう、そういう問題も出てくるでしょう。

それで、最後に、私の考えるグローバルエリート、こうなったらいいなあと思った最近の例を紹介いたします。半年ほど前にですね、アメリカのホーランド市で大学の先生を呼んで、ワークショップをやったんですね。その方はアメリカの海兵隊の兵士の息子さんで、生まれたのが沖縄で、その次、NATOの関係でドイツに行って、そこで育ったというかなり変わった経験の持ち主なんです。ホーランド市で集まったオーディエンスの中にはいろんな分野の専門家がいて、それぞれ、話しやすい言語が違ったんですね。みんなが英語が得意というわけではなかった。もちろん、この方は英語で発表されたんですが、「質問は、みなさんの話しやすい言語でどうぞ」と言わはったんですね。すると、みんな喋る喋る、ドイツ語、フランス語、ロシア語、リトアニア語、ポーランド語で聞いた人さえいました。何とそれに対して、この先生は、聞かれた言葉ですべて答えられた。そうした言語以外に、ヘブライ語もできると。日本語は、まだちょっとということでしたが、北海道大学で客員教授をしている時、ずっと、日本語教室に通っていたとおっしゃっていましたがね。

これは、感動的な場面でした。つまり、英語一元化と言いつつ、実は、アメリカ人ってこういう人がいるんですね。何も、アメリカ人って全員が、世界中に行って「Can you speak English?」っていうわけちゃうんですよ。これだけ、世界のありとあらゆるローカル性みたいなものに対する極めてデリケートな感覚、謙虚さみたいなのをちゃんと持ってる人が大学の先生でエリートになっているわけですね。英語さえ喋れば、グローバルエリートだと思っているバカに、この人の存在を見せてやりたかったですわ。アメリカの奥深さというのは、こういう人がいる点か、と思いついた次第でございました。ほんとうのコスモポリタンが、ちゃんといるわけですね。私、今、コスモポリタンと申しましたけども、コスモポリタンってのは、ほんとうに美しい言葉だと思います。なにになに人といった、人種、生まれた国、そういうものの枠からなかなか出て行くことができない人と違って、ひとりのヒューマニティーとして、人間として生きていけるんだ、と。このコスモポリタンという言葉は、とても美しい言葉だと思いますけれども、しかし、今の日本で喧伝されてるのがですね、決してコスモポリタンの育成ではなく、グローバル人材みたいな極めて下品な言葉になってしまうという、この辺りが、今の日本の精神風土の貧しさを、図らずも反映しているような気がして、私は憂鬱になる次第でございます。

クオリア AGORA2014 年

第9回「グローバル人材とは何か！ 求められる能力とは？」

☆討論

▽ディスカッサント

佛教大学社会学部教授 高田 公理さん

京都大学大学院理学研究科教授 山極 寿一さん

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授 山口 栄一さん



堀場製作所最高顧問 堀場 雅夫さん

京都大学人文科学研究所教授 岡田 暁生さん

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）



ファシリテーターというのは、みなさんの中のインスピレーションを喚起させて、そのインスパイアされたものをしゃべってもらい、いわば賑やかさと思しますので、いくつかインスピレーションを掻き立てるようなことを話したいと思います。

最初に「スーパーグローバル人材」というのが、とても下品な言葉だということが出ました。私も全くその通りだと思います。「スーパー」がつくとだいたい下品な言葉になります。私が今でもおぼえているのは、日立製作所です。「スーパー」をつけた製品を作ったことがあります。「スーパー

日立1」っていうのを作ったんです。「SH-1」って言いまして、1991年に日立が社の命運をかけて開発したマイクロプロセッサです。日立はこれで世界ナンバーワンになるんだ、インテルも凌駕するんだと言い出したんです。ところが、これ、見事に失敗して、携帯電話からもそっぽを向かれて、もう今は全く使われていなくて、結局のところ日立は、事業をやめました。というわけで、やっぱり、何か下品な臭いがするっていうものは、うまくいかないんだと思いますね。

このグローバル人材の「人材」という言葉も、ほんとに命令通りにしか動けない「兵隊」を感じさせます。でも、グローバルエリートとかですね、グローバル人物、あるいはコスモポリタンであるっていうのは、それは、大事なことなんだろうなあという気がするわけです。私なりに考えてみますと、例えば、私自身は、グローバルエリートではないけれど、少なくともコスモポリタンになれたということを思います。なった時期はいつだろうか。それは、自分の中に、揺るぎない軸を持つことができた時なんです。アイデンティティという言葉でもいいんでしょうけれども、軸を持った。そんな、ある個的な体験があるのではないかと思います。

そこでまず話の契機として、自分自身の個的な体験、どうやって自分はコスモポリタンになったか、というお話から始めたらいいかと思います。山極さん、いかがでしょう。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）



もう、きょうは、全然予想もしないラジカルな話をなさっていて、大概、たじたじとなって聞いてました。私がコスモポリタンになったのは、人間を外れたってことなんだろうね。ゴリラを見てですね、こら、人間ちゅうのは、国同士が、文化が、どうのこうのと言ってるけど、まず、人間ちゅうの

を離れないといかんのやないか、というのをある時から思い始めて、すっかり気が楽になりましたね。

まあ、ちょっとだけ言うと、堀場さんが最初に言わはったようにね、コスモポリタンというのは、グローバルってことは、「国賊」になれということですね。例えば、アメリカは日本に原爆を落としました。で、アメリカ人の中には「原爆は、平和をもたらすためにしょうがない話やったんや」と、言うてる人がたくさんいましたし、今でもいます。日本人で、日本の中でそういうこと言ったら袋叩きに合いましたよね。それほど、やっぱり国の差があると思います。逆に、真珠湾攻撃ってのは、日本では「正当な戦いだっただ」というし、アメリカ人は「とんでもない話だ」っていうしね。ベトナム戦争の評価だって、これ、全然違うわけですよ。だから、これは、全くアイデンティティの問題で、アメリカの国で暮らそうと思ったら、そんなことはいえないわけで、日本で暮らそう、日本人であろうと思えば、そんなことはいえない、という時代が続いています。でも一歩外れて、その視点を変えて見る人間っていうのが、やっぱりいる。それは、すごい勇気とすごい努力がいるわけですよ。しかも、視点を変えるには根拠が必要なんですね。その根拠を自分で確立するというのが、さっきから、岡田さん、山口さんがおっしゃったアイデンティティを変える、確立するっていう話だと思います。

それで、そういう体験をどこでするかかっていうと、例えば、ぼくらの研究室だと、「子捨て」というのをやるんですね。どういうことかという、サルのいる世界に学生を送り込みますから、その時、指導をせずにポーンとおいてくるだけなんです。あと1年一人で暮らしなさいってことをやるわけです。するとですね、1年経って帰ってくると、ものすごくたくましくなっているんです。やっぱり、言葉も自分なりにおぼえるんですね。一人しかいないもんですから、誰も日本語を喋らないし、しかも、誰かの協力がなければ絶対生きていけないですから、そのために結構苦労もして、ローカルな言葉もおぼえるし、スタンダードなフランス語もスペイン語もおぼえるし、そういうことをして帰ってくると、一皮もふた皮も剥けて、たくましくなってる。その時に、初めて日本ってものを見るんですね、外側から。それは、非常に重要なことだと思います。これは、でも、若いうちにやっとなないとダメでしょうね。自分が、もう、がんじがらめになってから、社縁、地縁というようなものに縛られてから海外に行っても、これは、もう、見物になってしまうので、もう、体験というわけにはいなくなってしまう。だから、最後に岡田さんがおっしゃったことは、非常に重要だと思っていて、若いうちに行かないとダメでしょうね。そういう「グローバルエリート」を育てる戦略を確立しないと…。そういうことを、実は、日本以外の国はどんどん始めているんじゃないかと思うんです。

ところが、それを、日本では「人材」という形でプログラムに乗せて、例えば、「SSH (Super Science Highschool)」なんかもそうだけど、高校からやろうとしているわけです、プログラムとして。それでは何もアイデンティティを確立できない。つまり、将来、プログラム通りに動く人間にしなければならないと、話を聞いていてそういう気がしました。

山口

「こすて」って、どんな字を書くんですか。

山極

子どもの「子」と「捨て」るです。今は、こんなことやっちゃあいけないんですよ。今の大学教

育の常識だと、教員がついて行って、ずっと教えて、連れて帰ってこなくちゃいけないことになっています。

山口

ああ、「捨て子」ですね、わかりました。では、高田さんいかがでしょう。

高田 公理（佛教大学社会学部教授）



いやあ、コスモポリタンとかおっしゃっていただいたんですが、ぼくは、日本から、ほとんど出たことがないんですよ。ただ、大学の理学部を卒業すると同時に、日本の国内にも異文化地帯はいくらでもあるんでね。しばらくは、トラック運転手をやったり、それから、工務店で建築関係の仕事をすると一緒に働いたり、えーっ、酒場を経営したり、と。あのう、酒場というのは人間がやってくるわけですけど、カウンターの中から酒場の風景を見ていると、猿ヶ島とよう似ているんですね。いろんなことやったはる。ずいぶんそこには、いろんなものの考え方をしたり、いろんなことをする人がい

る。それで、こういう生活を送る中で、「絶対これが正しいんだ」というふうなことを、簡単に決められへんなあということを手につけたんです。このことが、もしあるとすると、コスモポリタンの資質なんかもしれんなという気がするんですね。

変な喩え話になりますけれども、日本の清酒は、お酒ですけれども、90年ぐらいまではひたすらですね、純米吟醸。この一つの頂点を目指して、日本のお酒ってのは自己研鑽をしかったわけですね。ところが、その間に、確実に酒の消費者は減っていった。今でも、減っているんですけども。ただですね、21世紀になってから、日本のお酒というのは、ある種やけくそみたいなところがあつてですね、すべてが純米吟醸でなくても、いろんな味のお酒があつていいんじゃない、という方向へと、ダイバージェンス（divergence＝トレンド転換）が始まったような気がするんですね。ワインの世界ってそうなんですよ。ワインも、もちろん、ブルゴーニュとボルドーというワインの頂点を、フランスは演出するわけですけども、世界中にこれが広がることによってですね、例えば、非常に雨の多いニュージーランドみたいなところで、本来なら、ワインになりえないようなブドウからその土地特有のワインみたいなものが生み出されてきている。これ、何を言おうとしているかという、そういうような多様性を認めるようなことが可能になった時にですね、例えばワインは、非常にグローバル化していくというふうなことがあるんじゃないか。日本酒もやっぱり、そうなんですね。

と、同様に、人間にそれを当てはめてみると、単純に、これは絶対正しいにやというふうなことを簡単に決めないような、決めてしまわないような余裕というのが、コスモポリタンの唯一の条件なんかな、と。それを、山極さんは、おサルさんの世界でやらはったと。ぼくの場合は、建築関係の肉体労働者とかですね、酒場に酒を飲みに来るいろんな稼業の人とか、常識では考えられんようなものの考え方をする人がいっぱいいるわけで、それもまたしゃあないなと思うことによって、物の考え方に幅が出てくる。そんなわけで、岡田さんのおっしゃる異文化経験ってのは、国内でもできるかもしれん。

岡田 暁生（京都大学人文科学研究所教授）



あの、それ、ちょうど言おうと思ってたんですよ。空間的なことばかり、つまり、外国のことばかり考えてたらダメなんですね。大事なのは、「複文化」を自分の中に持つっていうことで、一元的な文化の中でしか生きていけない人間というのが、一番悪い。だから、それは結局ね、言語、国家が違うということもあるけれど、身分が違うとかね、社会背景が違うというのも当然入ってくるわけです。そのためにも、私、非常に大事なものはね、趣味の世界を持つことやと思ってるんですね。私、趣味が、いっぱいあるんです。本職では先生、先生言うてもらえるわけですけども、趣味の世界に入れば、ただの一兵卒ですからね。全く違う職業の人と付き合うわけですから…。これは、自分を相対化する意味で、非常にいいことで、一つの世界の中で「ボスザル」になってしまって、自分は偉いと思ひ込んでしまうことが、一番良くないと思いますね。

山口

先ほど岡田さんから、「育てられたエリートっていう言葉は自己矛盾。で、才能は勝手にでてくるものだ」というお話があり、ぴーんと来たのは堀場さんでした。学生時代からベンチャー企業を起こされ、先生もいない状況ですべてを切り拓いてこられたということで、それこそ、才能は勝手に出てくるということを実現化されたと思います。堀場さん。岡田さんの話を聞かれて、感じられたことをお話し願えないでしょうか。

堀場



企業も人材教育いうてですね、相当、金かけてね、最初の3年間ほどは、あんまり仕事させんとつこてるんですが、その、一方において、アホはアホやと、^{かしこ}賢いは賢いと。しかし、アホでもいっぱい使うところがあるんですよね。そやから、アホを賢うにしようとする、一番迷惑をかけるのは、そのアホな人なんですな。ワシはできひんのにさせられる、ちゅうのが一番人間にとって悪いから、そら、会社でアホということは言いませんけれども、この人は、こういう特徴を持ってる、この人にはこれがある、ということを知って、その人の最も適した仕事場を与えることが、ぼくは、会社が、人間性を一番尊ぶ方法だというふうに考えています。それで、3年間のうちに、その人の特性を知って、最も会社の中で、その人が生き生き働けるような仕事場を与えるということであって、岡田さんがおっしゃったように、教育で賢うするとか、アホにするとかいうことは、なかなかできない。ただ、ぼくが一番大事に思うことは、あらゆるチャンスを与えて、その人にメニューを選ばず機会を、会社は与えるべきであって、強引に、この飯を食え、お前はこれが好きなはずやということはないっていうことが大切だということです。われわれの会社の社是である「おもしろおかしく」っていうのは、まさに、その人が、生き生きと働ける場所を、会社も含めて探し出すということで、これが一番大切だと思っています。教育でどうこうするということではなく、自分がどこで働いたら一番能力を発揮でき、自分がおもしろおかしく人生を送ることができるか—それをリサーチする期間は、十分その人にあげるべきだし、会社としても、積極的にその人の特徴が何であるかを探し出すということが必要だっていう意味で、3年間ほどは、一応教育と言ってますが、実態はそういうことをしています。

山極

さっき「国賊」になることだ、って言ったけど、実際、日本で起こっていることは、かなりやばいんじゃないかと、ぼくは思っているんです。岡田さんもぼくも、若いうちに異文化を体験することが重要だと言ったけど、例えば、アフリカのいろんな国は、みんな1960年代に独立したのですが、それまでエリートたちは、みんな、宗主国に子弟を送ってました。だから、子どもたちは、フランスやイギリスとかスペインに行って教育を受けて、ほとんど、例えばフランス人になって自国に帰って来て、エリート官僚になる。そうするとね、その国のことなんて考えないんですよ、全然。もうその国にアイデンティティがほとんどない。アイデンティティといえは、自分と親族の私腹だけです。だから、とてもひどいことをやって国が崩壊する。独裁者が出てきてね、いろんな国でクーデターが起こりました。今でも起こっています。

日本は今、資本主義の限界に来てて、個人の欲望を最大限にするようなお金の使い方をしているわけですよ。それをどんどんやると、子どもを早いうちに英語化しようとして、英語学校、インターナショナルスクールに入れようっていう親が出てくるわけですよ。あるいは、お金があったら、小学校時代からイギリスやアメリカに留学させちゃおうっていうことになる。子どものうちから、日本を外から見られるわけですね。これでほんとうのコスモポリタンになれるかという、なれませんね。ひどい場合には、非常に個人主義的になり、地域というものを体験せずに大人になって、人を見る目というものが全く育たない。要するに、さっき、堀場さんがおっしゃったけど、アホはアホなりって言うか、人間にはいろんな人がいて、いろんな役割を演じていて、何が幸福か、何が楽しいかってことを、子どものうちに肌で感じて育っていかないと、しかも、母国語ですよ。そういう共感だとか、一緒に生きる楽しさが実感できないと思うんですね。それを持った上で、なおかつ異文化体験ってのが必要だと思います。だから、アイデンティティっていうのは、自分の国を外から見られるというだけの話じゃなくって、アイデンティティの中には他の人間がきちんと存在していないとまずい。自分の文化があり、他の文化があり、それを一ひと処ところに包含するんだけど、その中に人間性というものがきちんと入っていかないと、やっぱりまずい。今の日本の教育の仕方やコミュニケーションのあり方は、あまり人を愛せない人間がたくさんいたりですね、多分問題になってるのと同じ話なんだろうけど、そういう方向で動いている気がする。その一環として、海外に行くとかいう話ができきているのが、私は、すごく心配なんです。



山口

では、ここでお話を転じます。

せっかくの機会だから岡田さんにぜひ聞きたいことがあります。前回の広上さんの時の岡田さんのお話で、ちょっと目から鱗が落ちたことがあったんです。それは、ずーっと謎だったんですが、ヨーロッパでクラシック音楽が確立したのは、バッハ(1685~1750年)やモーツァルト(1756~1791年)やベートーベン(1770~1827年)が活躍した18世紀。しかもドイツ諸国(この当時、ドイツは統一されていませんでした)、そして、オーストリア=ハンガリー帝国ですね。それから、約40年後に、まるで爆発するように、哲学がドイツ語圏で生まれる。名前をあげるまでもなく、カントから出発してフィヒテとかヘーゲルとかが生まれて、それからまた40年後ぐらいの19世紀の後半から20世紀のはじめ、それこそ、パラダイムを壊すようなタイプの物理学が続々と、ドイツとオ

ーストリアで生まれます。ボルツマン、プランク、アインシュタイン、ハイゼンベルク、シュレーディンガー。

それで、岡田さんに、「これは、何かあるんですか」と聞きましたら、「1795年にポーランド分割が行なわれてポーランドが消滅すると、その庇護を失ったユダヤ人が、ロシアから難民として中部ヨーロッパにやってきたんだと。それが、ある種のコスモポリタニズムを持たらしたんだ、っていうことをおっしゃってくださいました。そこで、きょうは、そのことを聞こうと思っていました。これ、いわばグローバルエリートというのが、文化の衝突によって自然発生的に生まれたわけですから、この辺のお話をちょっと教えてください。

岡田

いろいろ重要なお話が出ていますね。まず、山極さんのお話で、音楽の問題に関連させ、今どきの英語教育を見て私が、真っ先に連想することを一つ申し上げたいと思います。日本の社会は、音楽では、グローバル化、日本語を捨てましょう、英語を話しましょう、というのは、これ、実は、明治維新の時に起こっていたんですね。音楽は、基本的に言語が介在しませんから、「音楽言語」をヨーロッパに全部変える方がはるかにやりやすく、さっさと100年前にやってしまったんです。1900年ごろ青春を送った、ある有名な日本音楽の研究者は、「私は、物心ついた時から、日本音楽は、ヨーロッパの音楽よりはるかに遠いものでした」と言ってるんです。それぐらい早くから、音楽の世界では、グローバル化が起こってしまっているわけですね。まあ、その甲斐あって、多くの日本人の音楽家がアメリカでも、ヨーロッパでもどこでも活躍できるようになっているんですが、こういう人たちっていうのは、多くが日本人のアイデンティティなんて何にもないです。むしろ、それを、ほとんど軽蔑しているようにさえ感じられることがあります。先ほどの山極さんのおっしゃった、宗主国の留学からもどったアフリカのエリートたちがもたらす功罪という話と、はからずもダブリました。

それで、安直にグローバル化、つまり、自分の母国語を捨ててしまうということが、何もたらずかということですね。明治政府が、何で、音楽でこんなことをしたかということ、外国にバカにされたくないということ。まあ、白人コンプレックスでしょうね。都々逸なんか唄っていたら、野蛮人と思われる、という。日本にも、ピアニスト、バイオリニストがいるっていうことを、文明国家として対外的にアピールせなアカンということがすごくあったから、全部に唱歌を歌わせ、ドレミファに変えちゃったんですね。ところが、そういうことをするとですね、例えば、ぼくなんか、日本の音楽って何にも知らないわけですよ。ある歳になって、それに気づき愕然とするわけです。実は、真に世界的に活躍しようとする時、このことが、ものすごく足を引っ張るんです。つまり、日本人がベートーベンの研究なんかやったとしても、永遠に、どこまでいったってマキシマムで2番にしかなれないんです。これ、有名な指揮者の岩城宏之さんが言ったことです。

つまり、グローバル化っていうのは、実は植民地化なんですよ、はっきりいうと。植民地エリートになりましょうってことなんですね。インドなんかにはいっぱいいたわけですけど、ガンジーなんかでも、そういう人だったんですね。ちっさいころに英国に留学し、オックスフォードだかケンブリッジだかどっかで育ってる。で、まあ、母国語を捨てるという危険は、どれだけ意識しても意識し過ぎじゃあないだろうと思います。

それから、山口さんの19世紀におけるドイツのユダヤ人科学者、芸術家、哲学者の爆発の問題ですけど、要するに、このころ、東欧からのユダヤ人が、ドワーっとドイツに押しかけたわけです。



その後、ユダヤ人の移動ポイントというのは、フランスに移動し、次はアメリカに移っていったんですね。だから、アメリカの今の知的栄光の基礎を築いた人たちは、ほとんど、実はドイツ経由でニューヨークとかに行っていたんですね。じゃあ、どうして、哲学、音楽、科学の分野で、ユダヤ人がこれだけ能力を発揮したかという、はっきりいえば、医者、芸術家、特に音楽家、それに弁護士というのは、伝統的なカトリックの価値観の中では、下賤な商売やったからですよ。今はエリートと思うでしょう。キリスト教では、これ、全部忌まわしい職業です。医者って、神様が作った体をいじるわけですからね。科学者は錬金術師、弁護士なんかは、右のものを左に移すだけ、自分で何かを作らない職業は、キリスト教的な価値観の中では低い地位に置かれていた。逆にいうと、ユダヤ人はそういう職業にしかつかなかった、そういうところでしか生きていけなかったという側面がある。それともう一つ、科学とか音楽は、基本的に言語が介在する割合が極めて少なかったから有利だったってことですね。数とか音とかいうのは、言語に左右されないから、その分、ナショナリティーがあんまり問題にならない、というところがあったんですね。

山極

岡田さんは、言葉と音楽が違うという話をされましたが、音楽は、言葉を学ばなくていいという利点がある。だから、このグローバル化で、音楽の果たす役割ってあるんじゃないかと思うんです。今、日本では、若者は言葉を捨て始めているんですよ、実は。言葉とは違うコミュニケーションツールで会話をし始めている。絵文字も使っているし。本来の言葉の意味とは違うところに、コミュニケーションというものを求めようとしていて、コンサートもおおはやりです。これ、未来に違うことが起こるんじゃないかという予感がするんですよ。グローバル人材という話にはならないかもしれないけれど、グローバルイズムの中で、音楽の果たす役割というものがあると思うんですが…。



岡田

まずですね、音楽は言葉に束縛されないから、ということなんです。そのことに、反論というか、ぼくの確信を、まずひとつ申し上げます。よく、音楽は国境を超えた言葉だって言われ、そう思う人も多いと思いますけれども、私は、「そうじゃありません、音楽ってのは国境があります」といいたいわけですね。例えばですね、私のジャズの先生、ジャズピアニストで、世界中どこでも生きていけるはずですけど、それは、ジャズミュージシャンだからですよ。彼が、尺八奏者であったなら、どんなにうまくても絶対無理です。それは、ジャズって音楽が世界音楽になってるからなんですよ。はっきり言って、アメリカの音楽だからですよ。あるいは、日本人でも、バイオリンがものすごくうまくなったら、アメリカでもオーストラリアでもヨーロッパでも場合によっては、台湾なんかでも、バイオリン奏者として生きていけるのも、世界中にバイオリンがあるからです。これピアノも同じですけど、つまり、帝国主義化された欧米の音楽がユニバーサルになっているからこそ可能なんです。長唄の師匠は、どんなにうまくても、ケープタウンでは生きていけませんわ。その意味で、音楽の普遍性っていうのは、あんまり真に受けないほうがいい。その普遍性というのは、言語以上に欧米一元化が進行しているという意味においてだ、ということなんです。

先ほどから申し上げておりますが、私、最近、ジャズに熱狂しているんですね。で、ジャズが生まれるのは、大体、1920年ぐらいからなんですよけれども、大体、ジャズとボサノバ、タンゴ、サン

バとあって、同じ時代に生まれているんですね。これ、どういう経緯で生まれてきたかという、キューバとかブラジル、アルゼンチン、アメリカの人たちは、最初は、ヨーロッパの音楽をそのままやってたわけです。でも、その移植されたヨーロッパの音楽の中から、一種の「クレオール文化」が出てくるわけですよ。つまり、言葉で言うと例えば「英語」がベースになっているわけやけど、妙な訛り方をして、アルゼンチンならタンゴ、ブラジルだったらサンバ、



アメリカならジャズというように、現地的なものと混ざり合って、訛りになって、最初はブローケンだったんだけど、次第にブローケン自体が一つのスタイルになって世界的に通用するものになるという、このプロセスっていうのがあったと思うんです。それで、最近よく言われる「クールジャパン」。私はこの言葉がきらいなんですけどね、これが、世界の人を魅了しているといわれていますが、これ、ひょっとすると、ある種、欧米発の文化の日本的クレオール化みたいなのが起こって、独自のスタイルが作り上げられているんじゃないかなと強く思いますね。

もう一つ別の例です。音楽が果たせる役割で、私がいつも思いますのは、ウィーンなんですね。ウィーンは音楽の都というふうにいわれるわけですが、このイメージは、オーストリア政府が、実は、100年ぐらい前から「国がかり」で、つまり、ハプスブルグ帝国がもはや、政治的、経済的には持たなくなったので、音楽イメージでもってプレゼンスを示そうというんで、国を挙げて、ありとあらゆることをして、世界中で宣伝して作り上げたある種の「美しい罠」なんですね。ウィーンと同じぐらい音楽の伝統のある街は、実は他にいくらでもあるわけですよ。ところが、ウィーンは「音楽の都」というイメージを作っちゃった。何ていうんだろ、音楽は言葉がわからなくてもわかりますから、そういうものが国のシンボルとしてあると強いですよ。まあ、これ、スポーツでもいいんですけどね。あのう、学会などでも、仕事の話だけでは、絶対、人間関係は深まらないんですよ。昼間のディスカッションだけでは、それで終わる。その後、話が弾む話題というのは、大体限られていて、音楽とサッカーの話なんですね。で、何だ、相手もこの話が好きなんだという、わーっと話が盛り上がる。こないだも、ドイツの学会で、ブエノスアイレスから来ている人とお友達になったんですけど、彼は、ボカ・ジュニアーズのファンクラブに入っていて、マラドーナを少年の時から知っていると言われてただけで、「どんなんやった。どんなんやった。」と聞きますもんね。文化のおかげというか、音楽やスポーツが、パッとある種の接着剤の働きをする力というのは、徒や疎かにはできないなと思いますね。

山極

例えば、今、いみじくもスポーツのお話がでましたけれども、外国で、言葉がわからなくても、すっとはいっていけるのは、コンサートホールだったり、スポーツのスタジアムだったりする。そこで、言葉は分からないが、何かわかりあえるような感じがするわけじゃないですか。そういうものを契機にして、いわばそこでは、ユニバーサルなもの、異文化でもいいけど、一緒に体験できてるわけですよ。そういう体験のできる仕掛けっていうのが必要なんじゃないか。例えば、京都でいえばね、インターナショナルなところだっていわれているけども、そういう仕掛けを、実はしていない。別に、そんなことしなくたって、世界から神社仏閣を見にやってくるというんでしょうが、それは、ただ、日本を見せているだけであってね…。さっき、ウィーンの仕掛けの話が出ましたが、まさに京都こそ、日本がそういうことをするきっかけになっていくんじゃないか。

それで、さっき、堀場さんがおっしゃったことに関係するんだけど、東京オリンピックね。つまり、一番安易でやりやすい話というのは、イベントなんですね。万博やったり、緑の博覧会、オリンピックやったりね。オリンピックってのは、一番大掛かりでお金もかけて、すごい集客力はありますけどね。ワールドカップもそうですけど、日本には、そんなことしかないのか。まあ、ウィーンが小出しにね、あるいはいろんな世界の都市が、首都に限らず、いろんな仕掛けでもって人を集め、異文化体験をさせている。その体験の中で人を作り、人の交流を推進している。これが、日本にとってもいいんじゃないかなあと思うんです。国家プロジェクトとして東京オリンピックをやる必要はないと思う。もっと、日本として考えることがありはしないか。日本は先進国ですから、一極集中型のものを、何度も繰り返して打つ必要は、ぼくはないと思うんです。

山口

では、後半戦に入ってきたので、これから教育の話をしたしたいと思います。えっと、何でしたっけね。スーパーグローバル人材でしたっけ。文部省はこういうことをやろうとしているわけで、とても下品な話だと思います。

育てられたエリートというのは自己矛盾だよというお話がありました。穿った見方をすると、エリートを作るには先生はいらない、ってことになります。確かに、そういう側面はあると思います。

例えば、ニュートンは万有引力の法則を発見したとき、先生を持たなかった。彼は、ウールズソープに帰って、三つの大発見をしたわけですから、先生はいなかった。1年半後ケンブリッジに帰ってきたニュートンを一目見た師のアイザック・バローは、彼の方が高みにいることを見抜いて、彼にルーカス教授職を挙げてしまう。

アインシュタインは、ハインリッヒ・ウエーバーという先生から嫌われちゃって、推薦状を書いてもらえないので、どこにも就職できなかった。アインシュタインは終生、ウエーバーを憎みます。

それから、物理学者でフランス人のド・ブローイって人がいますけど、これも先生がいなかった。元は歴史学者だった、ランジュバンに師事したものの、放ったらかしにされてしまった。

また、日本人の中のコスモポリタン、グローバルエリートは誰だろうかって思うと、何といても植芝盛平です。京都の人で、合気道の創始者ですけど、先生を持たなかった。しかし合気道の有能な弟子たちを背中で育てました。塩田剛三とか、名だたる合気道家が生まれている。

さて、京都大学というのは、「放ったらかし教育」で有名です。しかしその「放ったらかし教育」に弊害もあって、仰ぎ見るべき先生の背中がなくなろうとしている。そのために、京都大学は今、たいへんな勢いで地盤沈下しています。

いまやグローバルエリートを育てるための教育方法の確立が必要だと思います。教育の中で、それでもこうやったら、エリートってできるんじゃないだろうか、というアイデアがあったら、教えていただけないでしょうか。

高田

京大が、世界的に高く評価されるような研究成果やら出していたのは、それは、ひたすら遊ばせてくれたからですよ。ホンマに、趣味の世界というか、遊ばせてくれた。これ、前回も言いました



けれども、京都に国立大学をつくるという話が出た時、明治時代、全国から、京都みたいな遊興都市に大学をつくって学問ができるのか、という批判がわーっと起こったんだけど、実は、京大の先生というのは、祇園にいつづけたり、遊びほうけていることの中から、いろんな新しい学問とか、哲学とかいうふうなものを生み出してきた。でも、今、大学って遊ばせてくれないですよ。つまらんことばかりで…。



ぼくは、5年、大学にいたんですけど、授業に出たんは10回ぐらいしかない。まあ、出たら、もうちょっと立派になってたかもしれないですけど、授業にはひたすら出なくて、それで、自分でいろいろ考えることがあり得て、いろんなことをやった。

大学進学率が今、5割くらいまで来ているわけでしょう。例えば、野球で言うたら、マー君みたいな、ピッチャーとしてもものすごい有望な能力を持つ人を、教室に閉じ込めて紙と鉛筆で勉強させたらどの程度まで行くんやろう、というふうなことを考えると、紙と鉛筆と言葉を使って人間を育てていくという考え方が主流になっていくことだけでいいのかなあ、ということを感じるわけですね。これに関連して、もうお亡くなりになりましたが、日高敏隆さんが滋賀県立大学をつくった時に、「人というのは育てられない。ただし、人が育っていくような環境は準備することはできる、滋賀県立大学はそれをめざすんだ」というふうなことをおっしゃったように思うんですね。今の大学は、手取り足取り教えることばかりやっていて、いかにして育っていく環境を作るのかということには、あんまり大学と大学の経営者、先生は、思いを致しておられないような気がするんですけども、その辺りに問題があるんじゃないか。これは、大学だけの問題じゃなくって、とにかく、大学に行かないとまともな人間じゃない、みたいな考え方ってつまらない。中学卒業した段階です、読み書き算盤ぐらいは必要やということであれば、その後、それぞれの最も優れた能力を発揮できるような現場で研鑽を積んでいくことで、世界に通用する人になる可能性はあるやろ、と。桜のお医者さんとか、宮大工とか、京都にはそういうふうな世界があったように思うんですね。

山極

ここに来る前に、実は理学研究科の教授会があって、その後、FD (Faculty Development) をやってきました。まさにグローバル人材育成専門の先生が来て、「評価システムをさまざまな大学と共通につくって、単位の互換性を、これから日本はやらなくちゃいけないですよ」と。ヨーロッパは、エラスムス計画とかやっていて、もう、国の中だけじゃなくて、国を越えて単位の互換性と成績評価とかやっていますから、っていうような話なんですね。だから、ぼく、ヨーロッパで、英語教育はどれだけ進んでいるのか聞いたんですが、北欧はよくやってるけど、ドイツはそれほどでもないとか言って、あまり、中身がはっきりしないんですよ。

今、日本が一生懸命やろうとしているのは、さっき評判の悪かった英語だとか、それから、いうならばGPA (Grade Point Average) とかね、誰が見てもわかるような成績評価。誰が見ても、もちろん文科省が見たらってことなんだけど、要するに、教員の見方を統一させて、一貫した成績評価システムをつくり上げることに躍起となっているわけです。そうするとね、これ、逆に学生が育たないですね。プログラム化しちゃうわけだから、達成度ですね。ここまで達成すれば、と、学生自身も自分で自己評価をするし、先生もここまで達成したら、学生にこういう点をあげるということが、もうわかっちゃうわけです。わかっちゃうことをね、あくせくやってたって、独創

性のある学生は育たないですよ。それがプログラム化ってことなんです。そういうことをやろうとしている。

今、高田さんがおっしゃった、「遊ばせてくれた」っていうのは、つまり、自分というものが、どういう学問だとか分野だとか職業というものに向いているかを、体験しながら、自分で納得する期間が必要だということで、それが「遊ぶ」っていうことなんだと思うんです。私が学生時代もそうでしたけど、ずいぶん恵まれていたと思います。それを、最初から、がんじがらめのカリキュラムで縛って、ここまで達成しなさい。そこで、自分のエリート像を、自分で評価して、上に上がったかどうか自分で判断しなさいと言ってるわけでしょう。そしたらねえ、まさに企業戦士しか育たないわけですよ。あらかじめ決められた評価システムの中で、自分を外から評価するってことに慣れてしまう。でも、これにほんとに慣れちゃっていいのだろうか。

つまり、大学で非常に重要なことは、いろんな視点で自分というものを眺め、まさに、山口さんも岡田さんもおっしゃったように、自分のアイデンティティを確立することであるわけです。それには、やり直しができるようなフレキシビリティが必要であって、そのために遊ばせてくれる幅が要るんですね。いみじくも、岡田さんは大学生活は6年必要っておっしゃったけれども、今の学生たちには、十分な時間を与えてあげないとかわいそう。何故ならば、ゆとり教育もそうなんですけども、小中高と、いわゆる目標ありきの世界に、ずっと浸り続けてきて、ポンと大学で放り出されるわけです。すると、目標を失ってしまい、その時に飛びつき易いのは、外から与えてくれる成績評価システム、カリキュラムですよ。それに飛びついてしまうと、堀場さんが望むような人材育成はできない。もっと、自分というものをしっかり見据えるような環境づくりをしないとダメだろうと思うんです。

岡田

この問題を考えるたびに、常に連想するものがあるんです。人材育成っていうのは、飼育することですね。育てること。子どもから大人になりかけの人間という生き物を育てるんですね。で、あの、私の趣味の一つにですね、熱帯のメダカの飼育というのがありまして、非常に凝っているんです。「岡田暁生のメダカ」で、検索すればいっぱい出てきます。

それで、こういう魚を飼う人は二つタイプがあるんですね。一方は、バイオトープ型で飼おうとする人。つまり、時間はかかるけど、できるだけ放つといて、そのうち、光と生き物と水草と水質とのバランスがとれてきて、いじらんでも、自然に循環していくような環境ができるまで待とうとする人。もう一つは、いっぱい器具をつけて、全部数値化して自動制御しようとする、えー、機械と薬品でコントロールする飼い方をする人、ですね。私は、そんな高価な熱帯魚飼育の装置を買うほどのゆとりはないので、完全にバイオトープ型で飼う方ですけども、オート管理型の装置なんかすごいですよ。重病人の病室かというような管がいっぱいついてますからね、目盛とか。で、水質のペーハーがちょっと変わっただけで、ブザーが鳴って、自動的に水質を調整する薬品が出ます。バカちゃうみたいなね。今の大学が向かってるのが、完全にオール水質管理型のこの「水槽」ですよ、全部数値化して…。

京大の場合っていうのは、まあ、ずーっとバイオトープでやってきたわけですね。なんか知らんけど、なんかようわからんものがいっぱいあるけど、でも、時々、こっから、おもしろい生きものが出てくるなあ。そういうバイオトープができてたんですね。ところが、バイオトープなんていうのは、はっきり言って水質管理したら、こんな PH おかしやないかということがいっぱい出てくるわ

けですわ。普通、PHが6きったらあかん、といわれていてもうまくいくこともあるわけですね。でも、それをPHで調べられたら、「ええかげんな大学や」ということになってしまう。

ぼく、今の京大の変貌ぶりを象徴することとしてよく記憶しているのは、正面入った左側、あの楠の左側にですね、長い間バイオトープがあったんですよ。で、古いカメラとかが、それこそ、山極さんが入学したころからいたんやろうな、というようなカメラが、のそーっと泳いでいて、ぼく、あのそば大好きやったんですけどね。何か、今、潰されてしまいましたね。何で、潰すんやろうと思うんですけど、あんたが、入学したころからいるカメラかも知れんで、あのカメラ、どこいったんやろ。あのカメラ、処分したらたりあるんちゃいますかねえ。バイオトープが潰されてしまったっていうのは、何かを意味している気がしますねえ。



堀場

あのう、私、今度新しく京大でスタートした思修館っていうのに、すごく興味を持ってまして、できた記念に、うちの朽木の研修場に学生呼んでですね、ところが、実は、学生より先生の方がたくさん来てしまって、大すき焼きパーティーをやったんです…。思修館ができた一つのきっかけは、私の発言も一つあると思うんですが、博士と言うのは、「PhD」と書き「ドクターオブフィロソフィー」ですわな。なのに、京都大学博士というのは、うちにもおるんですけども、全然、フィロソフィーを持ってない。ただ、電気とか機械とかの専門家であっても、全然フィロソフィーがないから、こんなにPhDやったらおかしいんちゃうかいうと、そやけど、決まりがあって、これとこれとこれが通ったら自動的に博士になるんやという。そんなんおかしい。で、今、「ポストク」を使え使えといわれるけど、フィロソフィーのない人を、うちは、会社に入れるのかなわん、と断ってるんです。

要するに、何かもう、細かい学科がいっぱいありますでしょう。人文社会環境学科とか。先生に聞いても、なんやようわからんけど、あのころ、新しい学科をつくったら定員が増やせるというんで、そのへんの単語を三つ四つ集めてつくったら、なんやわけわからんけど、そこに入ってくるのが、学部4年、院でマスター2年、ドクター3年過ごして博士になる。そんなことおかしいと言っていたら、思修館ができたんです。山口さんも間もなく行かれますが、思修館ってどう評価されますか。ちょっと、きょうおいでの先生方に聞いてみたい。ぼくは、今の形態はともかくとして、あれこそ、グローバルエリートを作る一つのチャレンジと受け止めているんですけど、どうでしょう。

山極

ぼくねえ、思修館の最初の思想はすごく共感しました。だけど、できたものは、ちょっと違うなあという気がするんですよ。やっぱり、文科省から指導を受けるたびに、変更していったように感じるんです。思修館の最初の思想っていうのは、単に、少数の人間を集めてやるっていう話じゃなかったと思うんですね。全ての大学院生に開かれていて、そこで、いろんな既存の大学院教育にはないことをする。そこには、社会人とか、全く大学とは関係ない人も来て、いろんな講義や実習も受けて、さまざまな窓口として活用できるってことだと、ぼくは思っていたんですね。ところが、

すごく閉鎖的で、先生も限られていて、なおかつ、学生には、初めからいろんな能力を要求するような…。いろんな能力を要求しても、それぞれは、何も特化した能力ではないような、一体、どういう教育をするんだよ、みたいな疑問を未だに持っているんですが。

堀場

仰るとおりに、初めの話とは違ったようになってきているように思います。これ、文科省の責任なのか、京都大学がそうやったのかよくわかりませんが、しかし、少なくとも、今までですね、人を積極的に育てようという空気がなかった京大を、何か、変えるという動機付けにならないかなってことを思っていますけど。

岡田

あんまり、ぼく知らないんですけどね。知ってることというのは、人集めに苦労しているということ。文学部なんかからも、「学生を供出しろ」というぐらいの圧力をかけないといけないぐらい、人が来んかったという話を聞いています。これは、まあ、いろんな解釈ができると思うんですね。それぐらい、今の学生は、専門の外にでることを怖がるんだろうか、ていうこと。これ一つありますよね。専門の枠を越えてああいう所に行ってしまうと、そこにいる間はいいけど、そのあとどうなんにやろうという不安がものすごくあるんやろう。これ、企業の一括採用から一旦外れたら怖い、というのと似た話かもしれません。学生を、どんどんどんどん小さくしている。



もう一つは、多分、あのプロジェクトは、最初は、京大らしい、「まあ、好きなことやれや」みたいな、バイオトープをつくるということを目的としていたと思うんですね。しかし、それが、ああいうふうプログラム化された途端に、「好きなこと5年間、とにかくやりたい放題やれや」という面白さが失せるのかなと思いました。学生の志が低いというのと、プログラム化されてしまうと面白い事ができそうなのが弱まるのと…、理由はよくわかりませんが。

それから、どうなんでしょうねえ、ぼくの知り合い中にも、文学部から思修館に移されたのがいましたけど、教員のモチベーションがどうなのか。というか、今の教員が、大体、気宇壮大な旧制高校みたいな教育ができるタイプの人が、多分少ないんと違うかなあ、とかいう、まあ、いろんな問題を感じた次第です。

山口

はい、では、会場に前副学長で、思修館の教授をされている塩田さんがお見えになっているので、一言お願いしたいと思います。

塩田 浩平（京都大学大学院思修館教授）

これは、大変な状況で、ご指名をいただきましたね。思修館におりますんですが、堀場さんなんかには、大変な応援団になっていただいて力づけて頂いております。それで、思修館は、外向きには「グローバルリーダーをつくるんだ」と言っております。で、先ほどから議論



になっているんですが、「グローバル」という言葉も「リーダー」も、なかなか定義が難しいので、「グローバルリーダーをつくるんです」と言うと、背中あたりがムズムズするんですけども、そういうところで、今までにない仕掛けで教育をするということで作られたということなんです。グローバルなリーダーというのは、つくるものではなく、できるもんだと思いますが、そんなことを言っていると、われわれの立場がなくなりますんで、そういう環境をつくるということです。で、今の岡田さんのお話にありましたように、学生自身の資質、教える側の能力、見識というのがまだまだ十分ではない。ただ、仕掛けとしてできましたので、その環境をどう使うかってことが、かなり大事なことなんですけれども、きょう度々出てきましたように、今の日本の大学の評価も、アメリカの大学の基準に合わせるということで、例えば、大学院教育でも、決められた基準を満たして出て行くということでありまして、昔のような放ったらかしの教育はやりにくくなっています。

私は、今まで自由に仕事がやってこれたのは、先ほどのお話にも出てきましたが、師匠となる人が3人いましたけれども、みんな定年前で、先生に邪魔されなかった。それから、研究でも、結構孤独に過ごしてきて、近くに仲間がいなかった。それで、研究を理解してくれる人は外国にいて、それも立派な人で、彼らが、自分の仕事を面白いとか、褒めてくれたりすして、それがすごく励みになった。

ですから、コスモポリタンというのは、環境、そして、その人の気持ちっていうところがあるので、きょうのお話を聞いていて、若い人が心配になるのは、基準にあわないと不安になる、仲間がいなくて不安になるとか、そういうことが蔓延しているよう思えることなんです。しかし、私の経験からも、若い時は、ぜひ孤独を体験することがいいのではないかと思います。仲間のことばかり思っておりますと、ある範囲から出られないということですので、一人になってもどこかに仲間は必ずいるということで、あんまり、国のこと、国の境のことは気にする必要はないんじゃないでしょうか。

思修館は、大変期待は大きいので、私も含め、責任は非常に重いです。「リーダーは育てても、できるものではない」のですけれども、それを簡単にいうことは、立場上問題があり、控えさせていただきます。環境を整え、才能にあふれた人にはいつてきてもらい、育ててもらい、それをわれわれは邪魔しないということをやっていきたいと思います。

山口

ちょうど時間になりました。これから、ワールドカフェに移りますが、一言仰りたいという方はいらっしゃいますか。



堀内さゆり

最近、京都リサーチパークにはいった堀内です。去年から、京大で聴講生として美学の吉岡（洋）先生に師事しまして、伝統芸能を勉強しています。元々、看護師だったんですけども、途中で会社を作ることになったんですが、それは、京都大学で勉強するようになってから、急に、自分の好きなようなことができるという気持ちになって、そういうことになったのです。京大は自由で楽しいところで、まさに、岡田さんのおっしゃったパイオトープのようなところなんです。以前は、京都は出る杭は打たれてしまうというところがあってチャレンジができなかったようなのですが、京大ができてから、その垣根が取り払われたと思うんですね。堀場先生が学生だった時に起

業され、その先駆けになられたと思うんですが、堀場先生は、学生の時、どのようにチャンスを自分のものにされたのでしょうか。

堀場

ご期待に添えない答えなんですけど、事業をする気は全然なかったんです。ただ、原子核物理の研究をしていて、大学の2回生の時、日本が戦争に負けて、原子核物理の研究はしてはいけないということになり、米軍が、大学の物理学教室にある装置を全部どこや捨てよったんですよ。学校に行ったらしょうがないし、個人のところまでは米軍はこないだろうと思って、自分で堀場無線研究所をつくって、自分のやってた放射線の測定器の研究を続け、それで卒論を書いたんです。アメリカのこっちから、1年ぐらいで解除しようと思っていたらひつこくってね、いつまでも研究できそうにないので、しょうがないから自分で仕事を始めたんです。実は、私、学生ベンチャー第1号といわれているが、自分でベンチャーをしたくてしたのではなくて、大学にいても仕事ができないような客観情勢があって、自分で研究所をつくったんです。自分では、ほんとは核物理の学者になりたかった。今でもなりたい、でも、もう無理。ただ、放射線の測定器をつくってきて、今度福島のためにやっと役に立ったんですよ。60年間、赤字だったんですが、人が困っていることにつけ込んだわけでもなしに、ずっと60年間やり続けたおかげで、あの時に、200台測定器があったので、次の日、すぐに福島の小学校に送ることができた。こうして、長年取り組んできた研究が、人の役に立ったってことが、ぼくの、今一番嬉しいことでもあります。

金子健太郎（京都大学大学院工学研究科助教）

私、ドクターから、ストレートで助教になったんですけど、京都大学は、岡田先生のおっしゃったように自然の水槽のようなところがありまして、実は、山口先生のお力を借りてドクターの間にベンチャーを起こしました。これに対して、ちょっとアゲンストの先生もおられましたけど、それは面白い、どんどんやりなさいとおっしゃる先生が大多数でした。京大のそういう自由な風土は残っていると思います。京大全体が沈下しているのではなく、そういう風土は健在だと。これをいいたいと思います。京都大学がどう変わればいいのかということを言える立場にはありませんが、ベンチャーをやってみて、すごいサポート体制がある都市なので、京都でベンチャーをやるというのはいい選択だと思います。

木村美恵子（タケダライフサイエンス研究所長）

私が大学にいた現役のころ、京都府教委に呼ばれまして、落ちこぼれがたくさん出ているのを何とかしようという会議にでました。その時に、落ちこぼれの再生という、落ちこぼれを拾うという考えが出されたんですね。私は、あまりよくわかってはいませんが、そういう考えはいけなしいと思いました。先ほどのお話にもありましたが、いわゆる教科、紙と鉛筆と言葉でやるのが下手な人を、落ちこぼれというのは、おかしい。人にはそれぞれ能力があるので、いろんなことを選べて、そこで自分の能力を伸ばせるような仕組みをつくるべきだということを書いて、それができたのが嵯峨野高校の「コスモス科」です。すごい人気ということですよ。

エリートと言うのはどういうことか、人には、それぞれの能力があります。その、さまざまな能力を伸ばせる土壌が京都にはあると私も思っております。お話を聞いていて、ちょっと一言申し上げたいと思いました。

山口

では、これからワールドカフェに移りたいと思います。

私事でまことに恐縮ですが、私、孫が生まれました。それで、彼をあやしているときに、あることに気付いて愕然としました。それは、「ぼくらのなかで、こいつだけは 22 世紀まで生きて、22 世紀を目撃できるんだ」ということです。

そこで、22 世紀において、京都が「知」と「産業」のバイオトープであり続けるために、どんなことをぼくたちはすればいいのか。私たちの孫子に向けて何をつくってやればいいのか、ということではいかがでしょう。

長谷川 和子（京都クオリア研究所）

きょうはありがとうございました。京都大学思修館という個別の名前が出てきたり、京都大学をどうするかとか、インフォーマルな会議ならではのお話がいっぱい出てきました。それで、次のワールドカフェなんですけど、山口さんの方からお話があったように、京都をバイオトープとして、次の百年の計をどう立てていったらいいのか。それは、例えば大学では、企業とか、あるいは家庭が、バイオトープとしての機能を発揮して人を育てていくにはということ、議論していただいたらどうかと思います。今発言のあった金子さん、木村さんの考えも盛り込みながら話し合っていたらいいかと思います。

第9回「グローバル人材とは何か！ 求められる能力とは？」

毎日出会うグローバル人材の育成という言葉、島国日本のコンプレックスをそのまま表現しているようにも思えます。

ワールドカフェでは、京都としてバイオトープの機能を活かした人材育成策について話し合いました。

☆ワールドカフェ まとめ

▽第1テーブル報告 金子健太郎（京都大学大学院工学研究科助教）

ぼくも熱帯魚を飼っていて、岡田先生と、熱帯魚とメダカの飼育ですっかり気が合ってしまったんですけども、まず、岡田先生に言っていたように、バイオトープなのか、オート管理水槽なのか、どっちがいいかという、それぞれの利点を出しました。で、まあ、バイオトープというのは、いろいろな要因、愛情だったり、待つことが大事とか、ノウハウがいろいろ必要ってということなど、ネガティブな点もあるんですけども、非常にバランスのとれた池である。いわば、日本の里山で、人がうまく自然に手を加えて美しい自然を保っているのが、バイオトープであると。これに対して、オート管理というのは、魚の飼育で言うと、これは完全に、大量に増やして人に売るという、企業的なやり方なんです。ノウハウがあるから、誰が飼っても成功する。しかし、これの欠点としては、金太郎飴的で珍しい魚は増やせないのです。

では、どっちがいいかという、これ、ぼくと岡田先生のまあ、極論なんですけど、京都大学という観点で言うと、バイオトープの方がいいんじゃないか。やっぱり、ぼっと天才の出るようなのがいいし、バイオトープの方が安定した場で住み心地がいい。一方オート管理は、魚が多すぎて、住みにくい。これは、京都にも当てはまることで、応仁の乱以後は、かき乱されていない都市なので、それは、バイオトープが成立してるんじゃないかなということになりました。すばらしいベンチャー企業がたくさんあるのも、そのせいかなと話しました。



▽第2テーブル報告 榎堀 智（堀場製作所海外営業部 環境・プロセスチーム）

結論は、京都でいこう、です。あれ、ちょっと先に言ってしまいましたが、えーっとですね、まず、京都が持つものってのは、まず何なのかということをお話しました。職人さんの誇りとか、欧米に屈することなく、自信を持ってやっていくこととか、京都は日本の中心ではないのか、京野菜は日本のブランドだとかいろいろ話しました。

その後、外国で活躍できる人はどんな人かということも話しました。それについては、現地のノウハウを知っている人、それに、言葉というものが非常に大切であると。言葉はツールである一方、文化を体現している。なので、言葉をお話するというのは非常に重要なのだという話もしていきました。この中で、もう一つ出てきたのは、現地の人に負けない自信を持つ。現地に行って、現地の文化を知って、現地の人に負けない自信を持った時に、初めて自分が現地の人よりも詳しくなったその国で働ける人になるという話になりまして、そこからアイデンティティーの話に展開していきました。じゃあ、アイデンティティーはどういうものなのか、例えば京都は京都でいいとか。そして、それはどうやって伝えられるのか、自然に生まれるのか、親から与え



られたものなのか、環境のものなのか、教育なのか、ということを議論したんですね。で、こういったアイデンティティーということと「京都で行こう」というのはつながってしまっていて、京都というアイデンティティー、京都という誇り、そういったものをもって現地のことを知る、そういう人間が、グローバルで活躍できる人間ではないか。

最後に、日本人として海外で働くというのはどういうことかということをお話ししました。それで、自分自身、自己実現のためにだけに働くのではなく、日本のため、世界のために働くという思い、パッションをもって働いていくことが重要で、これを京都から発信していこう、という結論になったわけです。

▽第3 テーブル報告 上田 源（同志社大学学生）

私の班は、私のせいで文学的な話に終始しまして、与えられたテーマをちゃんと話し合うことがなく終わってしまいました。その中で、一つ面白い話が山口先生の話の中でありましたので、それを紹介させていただきたいと思います。それは三島由紀夫という人間と村上春樹という人間は基本的に天才である、という感じなんですね。ただ、三島と村上の一番違っている部分は、三島は演劇的であり、村上は創発的であるという考え方です。三島が演劇的であるというのは、どういことかということ、いわゆる、明治、大正、昭和期の全ての文学的な技法を取り込んで書かれたのが、私の考えでは「金閣寺」という最大傑作なんですけども、三島は昭和までの傑作である。村上春樹は、平成の世になって、演劇から創発的な部分を作り上げた人間だという話なんですね。三島というものは、論文で批判されることは殆どないです。文学的論文の中でも相当評価が高いんですね。一方、新しいものを作り出したがゆえに、村上は、基本的に賛否両論の中に生きている人間なんですね。でも、否定をされながらも、自分の文学を貫いている村上春樹というのはすばらしいと思っております。



それから、さっきの先生方のスピーチを勝手にまとめさせていただいたんですけども、木に例えさせていただいたんです。まず幹があります。それは、研究者ならば自分の研究分野、日本人なら日本人というアイデンティティーなんです。で、そこから枝葉を伸ばすということです。他分野、他国というところに枝葉を伸ばしていくことによって、光合成をする面積が広がりますよね。そうなれば、より幹が太くなっていくんじゃないかと思ったんですね。その枝葉を伸ばすか伸ばさないかという考え方の中心は好奇心だと思うんです。この好奇心を中心点に考えた際に、学問と学習の差という部分をもう少し考えないといけないと思うんですね。小中高校までは、習えばいい。おぼえればそれで、大学には入れた。しかし、学問となった途端、最先端になった瞬間、何かを問わなければいけないんですね。何かと問うて、そこに好奇心を持たせられるか持たせられないかっていうことが、その教育というものの中心線にあるんじゃないかなと思います。好奇心を伸ばしてもらえよう教育が大事だと思うんです。

それから、田中角栄と鳩山由紀夫という総理大臣の話なんです。小学校しか出てなくて英語の喋れない田中と成績、家柄とも超エリートの鳩山ですが、海外との交渉で田中は成功し、鳩山は失敗している。これ、何故かと言うと、田中は日本を中心に考え、鳩山は西洋を中心にものを考えたからではないか、と。もっとも、単純に才能の差だという話もありますが…。



▽第4 テーブル報告 川角 育代（若王子倶楽部左右）

京都が22世紀まで「バイオトープ」であり続けるにはどうしたら

いいか、を話し合いました。堀場先生がいらっしゃいましたので、そちらを中心に話していきたいと思いますが、堀場先生は「京都に住んでる人が、京都の偉大さを知ってることがまず大事だ」とお話になりました。特に話題になったのは、京都で培われてきた伝統産業、伝統文化は、そのまま、今のハイテク技術であり続けている。例えば、仏具の技術が金属加工の技術につながっていったり、鏡を磨く技術がCDに使われたりとか、ローテクとハイテクが常に一体になり、進化し続けているのが京都の特色ということ。また、産学連携ですとか、お茶、禅というソフトも充実している。

それともう一つは、下宿のおばさんとか芸妓さんら花街の方が、若い人の教育という役割をになっていたという京都独特の文化についての話も出ました。出世払いを許し、揉め事をとりなし、懐広く京都全体で若者を育ててきた。京都は、このように充電できる場として充実していた。例えば、昔から京都には、「しるこう」という、このワールドカフェのようなものがあり、いろんな考えを持つ人が集まりワイワイやって、身分、ジャンルを越えて情報を発信してきた。この充電したものを発信し続けることで、京都はいつまでも「知のバイオトープ」であり続けられるのではないか、という結論になりました。

高田 公理（佛教大学教授）

きょう、堀場さん 90 にもなって何であんな元気なんかと考えてたんですよ。彼は、大学を卒業してから 1 回も教育を受けてない。ずーっと文化をやってきはったんですよ。さっきね、上田さんが、学問と学習を比較したんですけど、これは、もっと、えげつない比較をすると、教育と文化というふうに言い直したほうがいいかもしれない。教育というのは充電なんですよ。電池に充電するのが教育です。充電したら、人間の体、心の中にいろんなエネルギーが出てくるんで、外に向けて放電しなかったらバランスが取れへん。充電したものを放電する、これほど気持ちええことないんですね。堀場さんは、ずっと放電し続けてはるんです。実は、日本中が、「教育神経症」になって充電、充電を始めてているわけでしょう。これ、必ず過充電になって電池爆発するわけです。それを、放電する役割を京都が担おうというわけです。これが彼女の言おうとしたことだと思います。しるこうです。



クオリア AGORA 事務局

みなさん、京都への期待を熱く語っていただきました。最後にスピーカーとして参加いただいた岡田さんに一言お願いしたいと思います。

岡田 暁生（京都大学人文科学研究所教授）

最後だったということもありますが、「教育神経症」というのが一番印象に残りました。きょうの話の締めくくりにふさわしい言葉だと思いました。つまり、みんな学校の中に長いことい過ぎるんですね。もうさっさと学校やめなさい。学校で、問題をひとに与えてもらうという状況に慣れすぎてはいけません。問題ってというのは、自分で発見する。

それが、学校を卒業する道であるということですね。問題発見能力を身につけるっていうことが、大学の最高の義務であるはずなんですね。学校的な生き方を卒業することは、すぐできるわけじゃなくて、やっぱり、一定期間が必要で、そのためにも、ぼくは、大学は 5、6 年ほしいなと思うわけですけども、今は、どんどんどんどん上にプログラム積み重ねていって、まさに教育神経症にかかっているわけです。この教育神経症を治癒しよう、あるいは、「子捨て」。大胆な表現ですけど、子どもは捨てよう

どなど、教育再生のキーワードであったかと思います。

それから、もう一つは我田引水ですけども、バイオトープ的な見方というのが、京都には向いているんちゃうかという気がしてしょうがないですね。京都が、一元管理水槽的なことやり始めたって、東京や大阪に勝てるわけではないんであって、そうなると、二流、三流の東京になってしまって終わりなんじゃないか。ただし、東京発信の官僚文化というのは、容赦なくありとあらゆるバイオトープを見つけて、これは整理整頓して、区画整理して更地にしなさいみたいなこと言うてきますから。だから、何ていうか、バイオトープ的なものを実は守りつつ、面従腹背で、なんか管理水槽にあわせているような顔をするといふ二枚舌っちゅうのがこれからいるんやろうなと思って、気が重くなります。ただ、この二枚舌、よく考えたら、昔から、京都人の得意技だったかもしれない。平安の昔から、権力者に対して、表向きそれに合わせているような顔をしながら、全然裏では違うことを考えて、自分たちのやり方は全然変えない、まあ、平安の昔からの京都の人間の得意技だったと考えると、少しは気の重さも楽になるという気がしております。

クオリアAGORA事務局

ありがとうございました。京都こそ、次の時代のことを考えてバイオトープになろうという一つのキャッチをいただきました。